



修学旅行について

9月29日(火)

今年度の修学旅行は残念ながら中止としました。2年生の皆さんにとって貴重な学びの場となるはずの行事を実施できず申し訳ない気持ちでいっぱいです。以下は栞に載せるはずだった巻頭言です。沖縄修学旅行に関する私なりの思いを綴らせていただきました。

今までに5回経験した下妻一高の沖縄修学旅行を振り返り、思い出に残る出来事を中心に書いてみます。

沖縄は不思議な所です。南国特有の強い日差しと鮮やかな海、人々のおおらかで優しい眼差しが旅愁をそそる一方で、台風が来るたび暴風雨にさらされる街の様子や沖縄が抱える戦争の遺産、本土との経済格差などが心に影を落とします。単なるリゾート地でないところが、いつ訪れても違和感に襲われる原因かもしれません。

ニューヨークの高層ビルに航空機が突入して崩れ落ちた2001年の「9.11」からわずか3週間後、初めて級監として沖縄に行きました。空港での物々しい手荷物検査や「安保の見える丘」から見える嘉手納基地で緊急離着陸を繰り返す戦闘機の姿は、「有事」という言葉をリアルタイムに実感しました。

戦時中は自然が作った洞窟を防空壕にしていた跡を辿る「ガマ体験」は強烈な印象を残します。生徒達と懐中電灯を片手にガマの奥深くに入り、一斉に明かりを消した闇の中で、飢えや怪我に苦しみながら身を潜めていた人々の姿を想像しました。ガマの外に出ると、当時「鉄の暴風」が吹き荒れていた場所にサトウキビ畑が広がり、デイゴの花が咲いています。沖縄戦で尊い命を失った一人一人の名前が刻まれた「平和の礎」が設置されている平和祈念公園からみる空と海はとても穏やかです。

その旅行中、「ひめゆり平和祈念資料館」での見学後、集合時刻にかなり遅れて女子生徒数名がバスに戻ってきました。他の生徒を待たせ、旅程を遅らせたことに対して理由も聞かずに生徒を叱責した私に、バスガイドさんが優しく声を掛けてくれました。「先生、生徒さん達の目は真っ赤でしたよ。展示された手記を読んでいて時間を忘れたのではないのでしょうか。見学をさっさと済ませて土産物屋に直行する学校もあるのに、これほど真剣に見学してもらえるなんて、沖縄県民として有難く思います。素晴らしい生徒さん達ですね。」その時の私は、未熟な自分を恥じる気持ちと下妻一高の生徒を褒められた嬉しさ・誇らしさが交錯しました。沖縄に行く度に思い出す懐かしい一コマです。

昨年は、台風19号の猛威が日本列島に甚大な被害をもたらしたのと前後して、間一髪のタイミングで旅行が実施されました。予定より数時間遅れで、全員無事に帰れたのは奇跡に近い出来事でした。その約2週間後には、沖縄の象徴だった首里城が、火災により跡形もなく焼け落ちてしまいました。テレビ画面に映し出され、無残に焼け落ちてゆく姿を呆然と見ていました。生徒達と共に観覧した鮮やかな姿はもうありません。そこに映し出される沖縄の人々の悲痛な表情は、彼らの心の支

柱が焼失したことも表していました。沖縄の歴史にまた一つ苛烈な思い出が加わってしまったことに胸が痛みます。

そして今回は、新型コロナウイルス感染症の影響で、当たり前の日常は一変しました。「新たな生活様式」はまだ作られている途中です。様々な不自由は予想されますが、今回の修学旅行が無事実施され、新たな思い出作りができることを祈ります。